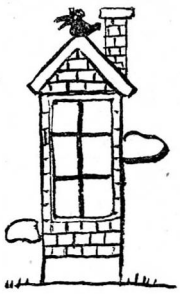

季節の作業

八月中～九月中

飼料

飼料作物

寒冷地

1　青刈大豆の刈取と跡作物の播種

青刈大豆の収穫は開花期～結莢初期が最適で、収量も蛋白生産量も多いが、跡作を考慮して刈取るべきです。つまり、秋作物（かぶ、レープ等）を播種しようとする場合には早目に刈取り、越冬作物（ライムギ、レープ等）を播種しようとする場合には八月下旬までに収穫すべきです。

青刈大豆は夏期の蛋白飼料として貴重なものですが、乾燥して貯蔵し、冬期飼料としても実に有用なものです。

2　かぶ、レープの播種

夏作物の跡地に播くかぶ、レープは晩秋から初冬にかけてのツナギ飼料として役立ちます。

かぶ・レープともに早播きほど多収で、肥料は硫安二〇、過石二〇、硫加八（一〇㌃当瓩）くらいが適当でしょう。

かぶは北海道では紫丸かぶ、東北地方では小岩井かぶ、下総かぶが多収品種です。またレープ・CO（合成ナタネ）も収量多く、一〇月末までに一〇㌃当り四、〇〇〇～六、〇〇〇瓩位得られます。

3　裏作物の播種

秋まき翌早春の青刈飼料として、北海道ではライムギ、レープ、東北地方では更に燕麦、イタリアンライグラス、レンゲ等があります。

水田に裏作する場合には、排水が良く、日光が豊富で、風当りの少い水田を選びます。レンゲ、イタリアンは中播き法で良く、その他の作物では耕起広幅栽培が多収です。

ライムギ、燕麦にはヘアリーベッチまたは耐寒性豌豆（オーストリアンウインターピー）を混播して蛋白生産量を高め、レンゲにはイタリアンライグラスを混播して（レンゲのみでは蛋白過剰）栄養価の均衡のとれた飼料を生産しましょう。

4　牧草の播種

牧草の播種は八月末までに完了するのが原則です。九月播は台風の虞あり、また遅播は冬枯れ率も多くなります。

酸性地は石灰で矯正し、できれば堆厩肥を投入し、化学肥料は硫安二〇、熔燐二〇、過石一五、硫加一〇㌔位（混播の場合）が適量です。砕土は細かく丁寧に、種子は砂等を混ぜて増量して均等に播種します。ルーサンには必ず根瘤菌を接種のこと（試験管から根瘤菌をとり出し、少量の水でうすめながら布切れで濾し、その水溶液を種子に湿らせて陰干し、直ちに播種覆土を行います）。

5　家畜ビートの薬剤撒布

家畜ビートの褐斑病防除と、夜盗虫の害を防ぐために六斗式のボルドー液に砒酸鉛を混じて撒布する季節です。家畜のエサとはいいながら、馬鈴薯、甜菜と同様に、薬剤撒布による増収を期待すべきです。家畜ビートはその繁茂した葉の栄養分が、やがて根部を肥大させることになります。

暖地

1　かぶの播種

水田西瓜・水田タバコ跡あるいは青刈大豆跡等にかぶを播種します。九月上旬播きより八月中、下旬播きの方が多収です。但し土壌に湿気がないと発芽がうまくいきません。品種は関東以南は下総かぶ、西南暖地はセブントップが適し、肥料は加里の肥効が大です。稚苗時の虫害を注意しなければなりません。

大根も早播き程収量が多いので、土壌水分を見はかって早目に播種すべきです。

2　青刈ソバとイタリアンライグラスの混播

タバコ・馬鈴薯・青刈大豆等の跡作として、九月の青刈にソバとイタリアンライグラスの混播が面白い組合せです。品種は秋ソバが良く、乳牛は好んで食します。

その後ソバは再生しませんが、イタリアンライグラスは二番草、三番草の再生力が旺盛で、尿をうすめて追肥を行うとどんどん生育いたします。

3　青刈大豆の刈取

開花期から結莢初期に収穫するのが最も収量多く得策ですが、跡作を考えて刈取るべきです。跡地は雑草が少く耕耘も容易です。刈取二週間前頃にレープやイタリアンライグラスを中播き間作しておくのも良いでしょう。

青刈大豆は高級な蛋白飼料ですが、乾燥すれば上質の乾草となり、冬期に細断して与えれば濃厚飼料の節約にも役立ちます。

4　移植レープの播種

春刈取には晩生・大型種（ハンブルグ一号）を用います。C・O（合成ナタネ）も多収品種です。

苗床を作り、苗床面積一〇平方米（約三坪）に一〇～二〇㌘の種子をまきます。移植は一〇月中旬～一一月中旬。

5　デントコーンの晩播栽培

九月上旬までに播種すれば、一一月上旬までに一・五㍍位に伸長し、可成りの収量が挙げられます。畦幅を五〇㌢位とし、一〇㌃当り八～一〇㌔の種子を条播するのが増収のコツです。速効性肥料をほどこし、品種はホワイトデントコーンまたは長交系の晩生種が青刈収量大です。

（かねこ）